モントリオール世界映画祭

カナダで開かれていた第 38 回モントリオール世界映画祭で 9 月 1 日夜、吉永小百合さん主演の「ふしぎな岬の物語」が審査委員特別グランプリを獲得した。吉永さんが原作選びから関わった初のプロデュース作品。「そこのみにて光輝く」のメガホンを取った呉美保さんも最優秀監督賞を受けた。日本映画が主要賞での「ダブル受賞」となった(朝日新聞 2 日夕刊)。

吉永さん 受賞に「きゃー」

モントリオール映画祭

1日閉幕したモントリ
ール世界映画祭は、日本
の活躍で沸いた。ワール
コンペティション部門に
加した2本の日本映画
要賞を獲得。「ふしぎ
の物語」は、エキュメ
ル審査員賞も併せて受
た。▼1面

「ふしぎな岬の物語
プロデュースし、自ら
した吉永小百合さんは
ンス語で作品名が読み
られた瞬間、「私が一
きゃーって言ってし
て、ちょっと恥ずか

最優秀監督賞を受賞した
さん（左）と、審査員特
ンプリを受賞した吉永小
ん（中央）＝1日夜、カナ
ントリオール、伊藤恵里

写真のように、吉永さんの喜び溢れる笑顔が印象的である。吉永さんの芸歴はじつに長い。「キューポラのある街」から長年にわたる「小百合さんファン」であり、今回の受賞作を含め、吉永小百合さんをじっくり語っていきたい。

ここでは、「ふしぎな岬の物語」が遺作となった米倉斉加年(まさかね)さんについて書きたい。米倉さんは 8 月 26 日に急逝した。「小さいおうち」で元気な米倉さんを撮った山田洋次監督が語る。「柔軟な感性と表現力、その奥に硬質な思想がでんと座っている、素晴らしい役者がこの日から一人消えたという思いです。」(朝日新聞 8 月 28 日)米倉斉加年さんは個性的な役者であり、演出家・絵本作家などとしても知られる。思い出に残る作品も多いが、私の好きな「寅さん」第 43 作の大会社の課長役が忘れられない。仕事に疲れ、家出をして電車に飛び込む。そこに寅さんが。『寅さん完全最終本』から。「焼鳥屋で知り合ったサラリーマン富永の家で彼の妻ふじ子と出会う。富永と飲んで、朝、目が覚めると彼の家にいたのだ。その時はすでに富永は会社に出かけて家にいなかった。妻と二人っきり。実に不思議なシチュエーションでの出会いだ。主ある身を決して好きにはならない寅だが、ふじ子の美貌に心がときめくのだ。」

ふじ子の役が大原麗子である。なんとも言えない「味」のある大原は、2009 年 8 月 3 日に若くして亡くなった。それも「孤独死」で。1984 年暮上映の「男はつらいよ・寅次郎真実一路」は、寅さんシリーズのなかでも好きな一つだ。東京のビジネス街で働き、片道 2 時間以上かけて通勤するサラリーマン、それと対照的な自由気ままに旅する寅さん。茨城・牛久のマイホームで夫を待つふじ子。80 年代(今も)日本社会を象徴する風景をリアルに描いた作品だ。それをじつにうまく演ずる米倉斉加年と大原麗子。

モントリオール世界映画祭の話から、寅さんへと飛んでしまったが、やはり映画の話は尽きない。またレポートでも語っていきたい。　　(2014 年 9 月 4 日)